

賃金労働者階級考

友 岡 学

ま え が き

- 〔1〕 あ る 定 義
 - 〔2〕 労 働 力
 - 〔3〕 労 働
 - 〔4〕 賃 金
 - 〔5〕 階 級
- あ と が き

ま え が き

報道されるところによると、社会党の「労働者自主管理研究会議」（代表委員大内力氏）は、社会党の「事実上の(?)」綱領である「日本における社会主義への道」をほぼ全面的に否定する文書を、今年の8月上旬にまとめたということである。

わたし自身、その文書をわざわざ求めて読む程の興味は持たないが、新聞が要約的に紹介するところから知る限り、「道」に対する批判点⁽¹⁾は、大筋では至極当然のことのようと思われる。政治的配慮から、この文書をめぐる論争は凍結されたそうであるが、その後、9月14日の諸新聞によると、「社会主義協会」は、その機関紙「社会主義」10月号で、大内文書を徹底的に反論するとのことである。新聞の見出しには、大内文書について、「(「社会主義協会」側から見ると、)「認識不足と独断」、「窮乏化変質」は誤り」などとあり、「社会主義協会」の意気込みが窺われる。

(1) 毎日新聞(1979. 9. 14)の要約——①社会主義の必然性は労働者階級の窮乏化に求められているが、労働者の状態が変わった現在は別の議論がなされるべきである。②平和革命とか議会主義とかいっているが、社会党の政権獲得後は暴力的、革命的な性格が強くにじんでいる。③生産手段の公有化とか計画経済は現代社会主義の多くが実現しているものの、必ずしも人間解放を保証したとはいえない。

わたしがこんなことを引き合いに出したのは、論争にコミットしたいからではない。折しも、毎日新聞の「編集者への手紙」(1979. 8. 21)に寄せられた直江清氏(68才)という人の一文に魅きつけられたので、それを紹介するに当たって、背景説明をしておく必要を感じたからである。その手紙は「社会党の“新しい道”私見」と題されている。

(前略)計画経済について、官僚支配を排し、労働者の参加が必要と高沢、大内氏ともに考えておられる。問題は労働者の定義である。高級官僚といえども、その勤労収入に依存しているという点では、広義の労働者であろう。(サラリーマン社長、重役またしかり。)労働者の範囲を狭義に限定し、労組員を対象として考えても、総評の中核

「官公労」は官僚であると同時に、労働者でもある。官僚と労働者の線引きはどこにあるのだろうか。（後略）（力点は友岡）

「労働者（階級）」を神の如く崇め、あるいは「労働者（階級）」という言葉で神の御名であるかの如く唱和してやまない人びとは、この真面目でしかも極めて常識的な疑問に、一体どう答えるのであろうか。その日から、すでに答えるには充分過ぎる時日が経ったけれども、毎日新聞に高沢、大内両氏からの答えは寄せられていない。両氏や社会党に限らず、「労働者（階級）」信仰の共産党を含めた、あるいはその他のマルクス主義者、社会主義者、共産主義者の誰かが、答えを書いてくれるのではないかと、心ひそかに期待していたのに残念である。

彼らは、こんな質問はつまらぬものだからということで、黙殺を極め込んでいるのだろうか。もしそうであれば、直江氏（のみならず、同様な疑問を持つ人びと）に対する大いなる侮辱であろう。それとも、「さて」と改めて思案して見れば、案外答えに窮して周章狼狽した挙句、「人の噂も75日」だからと、首をすくめて、世間が忘れてしまうのを待っているのであろうか。もしそうであれば、マルクス主義者たちの知的退廃ここに極まりということになるだろう。

わたしは、ここで、マルクス主義者に代って、直江氏の質問に答えようとするものではない。そんな責任も義務も、わたしにはない。わたしは、むしろ、直江氏に対して、「労働者の定義」にこだわると五里霧中に入り込んで抜け出られなくなると忠告したいくらいである。直江氏は、疑心暗鬼の体ながら、「労働者（階級）」神の姿をはっきり見せて貰いたがっていると見受けられるからである。

新聞に答えが出ないものだから、いささかがっかりしていた時に、タイミングよろしく、「経済理論学会」から、最新の模範(?)答案が送られて来た。その年報第16集(1979年)は、『現代資本主義と労働者階級』と題されている。これで、わたしは、直江氏の眼のどこかところで、マルクス主義者（と思われる人びと）が、今頃になって、「労働者（階級）」の定義に一所懸命であるのを知った。それは、必ずしも自明ではなかったのだ。

実は、わたしも「経済理論学会」の会員である。（不案内な人たちのために明かすと、この学会は、体を忠実に表わすには、「マルクス（主義）経済学会」と名乗った方がふさわしい。）やや無責任な言い分をしたけれども、わたしは、当学会に、わたしの経済学（研究）のいわば故郷ということで、なお所属し続けている。故郷からの一年ぶりの音信を受けて、無風状態であった故郷にも、どうやら時代の香りをもった微風がそよぎ始めたのかなと感じているところである。果して、マルクス主義者の知性をもって「労働者（階級）」神（の実）体は明らかにされたであろうか。これを最初の手がかりに、わたしなりの方法で、「労働者（階級）」神のお姿を垣間見たいものだと、久しぶりに誘われた知的興奮をなだめようと思う。

なお、触発されて、研究室に買い置きして手を触れることのなかった最新の『大月経済学辞典』（1979年）の該当項目を見ることになった。これにもしばしばコメントすることになるだろう。

〔1〕あ る 定 義

前記経済理論学会年報所収の富沢賢治『「労働の社会化」と労働者階級』によると、1960

年から61年にかけて、「労働者階級の構造はどう変わったか」というテーマで、「平和と社会主義の諸問題」誌において、国際的な討論がなされたそうである。（同年報7ページ以下。これからは、単に富沢〇〇ページと記す。）

主要な問題点は、①労働者階級の規定、②技術進歩による労働者階級の構造変化、③労働貴族の構成と地位の変化の三つであった。

『資本論』（1857）以後、100年以上が経って、「労働者階級の規定」が「労働者国家」を自認するソ連を含めた13か国が参加した国際的討論のテーマになろうとは、定めし地下のマルクスも苦笑を禁じ得ないであろう。100年間は自明であったのが、急に、必ずしも自明でなくなったのか。それとも、これまで自明であると思ひ込んで来たけれども、本当のところは自明でなかったことに今になって気付いたからなのか。

ところで、一大国際的討論の成果はどうであったか。それが、何と、「労働者階級をどう規定するか」という問題にかんしてマルクス主義者の間で見解の一致がない」（富沢、7ページ）ということが明らかになったのだ。これには、さぞかし、討論者たち自身びっくりしたであろう。直江氏に答えが書かれないはずである。直江氏は無いものねだりをしたのであるか。

それでも、依然として、事ある毎に、一群の人びとから「労働者（階級）」という称名を聞かされてやむことがない。「労働者（階級）は、ちゃんと存在しているはずである。その証拠に、マルクスがその言葉を使っているではないか。マルクスともあろう人が、無いものを有するなどと言うはずはない。ただ、われわれは、その標識（他との区別の目印）が分らないだけである。」これがマルクス主義者のつぶやきだとすれば、彼らの知性を愚弄することになろうか。

マルクス主義者の定型化された思考を私なりになぞって見るとこうなる。現代資本主義には欠陥がある。（その通りだ。）欠陥を正すためには、現代資本主義を革命しなければならない。（短絡し過ぎだ。）革命の戦略戦術は「階級闘争」の見地から立てられねばならない。そのひとつの見本が次の文章である。

労働者階級は三重の疎外（労働の疎外、生産諸関係の物化、生産力の疎外）(2)の構造の最下底にあり、その全重圧に苦しんでいます。労働者階級の解放が人間の解放につながり、労働者階級が革命の中心勢力となりうるのは、このためであると思います。…当面の緊急の課題は、労働者階級内部の各層の共通要求にもとづく連帯の強化ということになるのではないのでしょうか。……現代の……資本主義……における階級対立の特質は……「……独占勢力」対「反独占諸勢力の連合体」として現われている……。両陣営の力関係を分析……するには、運動論のレベルで……把握する必要があります。……私の報告の一つのポイントは……労働者階級の団結と反独占諸勢力の統一戦線結成のための戦略・戦術をつくりあげる……重要な課題であります。（富沢、33～35ページ）

うんざりする程の政治的用語の羅列。これは、党大会に提出されているような政治的文書であると言っても、疑う人はなかろう。経済理論学会は、革命政党的の出店であると言われて返す言葉はあるまい。

(2) という三重の疎外構造というのは、わたしには全く初耳である。今では、マルクス主義者の間で「常識」となっているのであるか。マルクスの疎外概念には、労働の疎外、労働生産物の（労

働者からの) 疎外, 類 (また人間の自己) 疎外の三つがあったはずである。なお, わたしは, マルクスの疎外概念にコメントを加えたことがある。「経済学における私有財産の問題」(鹿児島県立短期大学商経学会「商経論叢」第15号, 1966.) 参照。

こうして, 国際的討論の不首尾を挽回するが如く, ひとつの規定ぶりが示される。

階級規定の基本的標識は, 1. 生産手段の所有関係と, 2. 労働の支配関係とであるので, この二つの標識の組合せにしたがって階級区分をするならば, 階級は, 次の五つに分類される。

第1は, 生産手段を所有し, 他人の労働を支配しない階級。

第2は, 生産手段を所有し, 他人の労働を支配する階級。

第3は, 生産手段を所有し, もっぱら自己の労働を用いるか, あるいは自己労働と同時に少数の他人の労働を支配する階級。

第4は, 生産手段を所有せず, 自己労働力を販売しながら, 同時に他人の労働を支配する階級。

第5は, 生産手段を所有せず, 労働力を販売し, 労働の支配を受ける階級。

生産手段の所有関係でまず大別すれば, 第1, 第2, 第3は, 生産手段所有階級で, 第4, 第5は生産手段非所有階級です。これに労働の支配関係を入れて細分すると, 第1は土地所有階級, 第2は資本家階級, 第5は賃労働者階級であって, 第3と第4が資本家階級と賃労働者階級との間に存在する中間形態であります。第3と第4との相違は, 第3は生産手段を所有しているところからブルジョアの性格が相対的に強く, 小ブルジョアの性格を持ち, 第4は, 自己の労働力を販売するところから相対的にプロレタリアの性格が強く, 半プロレタリアの性格を持ち, また, 第3は, 資本主義的生産様式が社会を支配していくにつれて没落する傾向にあるところから旧中間階級と規定されうるといって, 第4は, 資本主義的生産様式が支配していくにつれて強化されるところから新中間階級と規定されうるところにあります。(富沢, 30ページ)

いささか引用が長過ぎたが, 若干のコメントを加えておく。

(1) この答え——は直接直江氏に向けられたものではないが——直江氏によって満足に受け入れられるとは思えない。直江氏が問いかけている「高級官僚」更に「官公労」(の「低級官僚」)はこれらの分類のどれに入れたらよいのか, さっぱり分らない。直江氏は, 恐らく, 大学教授たる大内氏, 国会議員で社会党副委員長たる寅沢氏をどのカテゴリーに入れたらよいのか, 更に御本人の富沢氏は一体どこに入っているとお考えなのか聞きたくなるのではなかろうか。事の序でに, わたしはどこへ入れて貰えるのか, あるいは入れられたのか, 是非教えて欲しいものである。こういう分類は一見もっともらしいが, 目的が目的であるだけに, およそ実用性はなさそうである。なぜなら, 「統一戦線結成」に実際動くのは, 抽象的な標識で, 知らない間に分類されたグループでなく, 固有名詞をもって実存する何の誰某という個人であろうからである。

(2) 概念の準位についての無頓着があらさまに見られる。一方で, 生産手段の所有関係及び労働の支配関係を階級規定の基本的標識としながら, 他方で, 生産手段の所有関係のみで階級を定義している。すなわち, 「生産手段所有階級」という言い方。

なお, 労働の支配関係を階級規定の一要因としながら, 支配せず, 支配もされない——

すなわち、労働の支配関係とは何の関係のない——状態を想定するのも、無節操過ぎる。

(3) 階級規定には、政治的要請から「両陣営」に区分する動機が働いているであろうに、「中間階級」というものを認めざるを得ないとは、階級規定そのものの破産をこそ証明するであろう。(しかも、そのことに全く気付いている節はない。)

(4) 前記基本的標識に従っても「生産手段を所有し、(自己の労働力を販売すること)他人に労働を支配される階級」を見出すことが可能であろう。例えば、兼業農家。日本では、今や農家のなかで、兼業農家は圧倒的多数を占めている。また、何らかの資産(株式、定期預金、各種保険、等)を所有し、「労働力を販売する」多くの人びとも、これに含まれよう。

(5) 皮肉にも、多くの労組員は、その労組の規模が大きければ大きい程、他の一面において、(言葉使いを真似て言えば)生産手段を(共同して)所有し、他人の労働を支配しているという実態がある。(3)(消費)生(活)協(同組合)もまた然り。生協の組合員は、生産手段を所有し、従業員を雇用する「資本家(階級)」である(?!)。

(3) マルクス主義者は、次のような新聞記事を目にすることはなかったであろうか。

朝日新聞(1978. 1. 18)「ふえる労組書記の労組『裏方の待遇改善』団交に“使用者”タジタジ」という見出し。「労働組合の裏方である書記が労働組合を結成、労組幹部を相手に団交する、というケースがふえている。……労働運動の本山、総評の書記労組といっても、総評本部に働らく書記ら86人だけの小世帯……労組の仕事を支える書記が全国に何人いるか、だれにもはっきりとはわからない。国労、動労、全通、全電通の4組合だけで2千人を越えるので、全国には少なくとも2,3万人、あるいは4,5万人はいるといふ推定もある。」この4,5万人の書記が書記労組連合体でも結成すれば、更に書記が雇用され、孫労組が誕生しよう。そして更にその先は……と、傍ながら気になる。

西日本新聞(1978. 4. 2)「“親労組”が解雇、“子労組”が反対」の見出し。「大牟田市の三池炭鉱労組(857人)の本部、各支部書記局の女子事務員などで組織している三池書記労組(7人)が現在三池労組が進めている赤字克服のための内部合理化計画で、4人の書記労組解雇を打ち出したことに抗議し、……本部前で無期限の座り込みストライキに突入した。」「社会主義協会」よ何とする。因果はめぐるとはこのことか。

わたしは、こういうこともあろうかと、すでに、1973年にこう書いた。

「労働組合は……書記局をもつものだが、書記局には当の労働組合員でない人が書記として雇用されている。雇用者(雇用主のこと)が『資本家』であるなら労働組合(員)も『資本家』ということだ。(更に、その書記たちが労働組合を結成して、書記労組の書記を外から雇用したら!?)」「雇用構造について」九州経済学会「経済・経営研究」第11集、1973、7ページ。)

親労組と子労組の関係と民間の労組員をふくんだ国民が共同して公務員を雇用しているということとは、論理的には全く同じ構造である。こうなれば、たちどころに、富沢式階級規定による分類第4、第5は立ち消える。官公労と民間労とは雇用関係では「敵対」しているにも拘らず、労働戦線上で手を結ぶことが可能ならば、「労働者(階級)」と「資本家(階級)」とが手を結び合うことが可能である。しかし、何に対してか。

(6) 富沢式規定第3の「生産手段を所有し、もっぱら自己の労働を用いる」階級(純然たる自作農や家族労作経営とも言われる自営業)と「生産手段を所有し……自己労働と同時に少数の他人の労働を支配する階級」を「あるいは」で一括するのは、「労働の支配関係」を無にするものであろう。

(7) 富沢式規定第1の「生産手段を所有し、他人の労働を支配しない階級」は「土地所

有階級」(純然たる地主のことか。そうだとすると、農地改革前ならいざ知らず、今日ではとるに足らない数であろう)であるとしているが、貸付資本家あるいは純然たる株主はこれに含まれないのか。また、彼らは、どうして「他人の労働を支配しない」と断言できるのか。

(8) 富沢式規定第4の「生産手段を所有せず」、「他人の労働を支配する」ことが果して可能か。可能とすれば、それは暴力・強制によるしかないであろう。それは、確かに社会主義にこそ見られたし見られることである。「上級の管理者とか、あるいは管理者というものを労働者階級から除外する」(富沢, 27ページ) ことを社会主義に当てはめた場合に生ずる困難は見事看過されている。

要するに、仔細に見れば、「労働者(階級)」は、規定されたが如くであるが、実のところ曖昧模糊のうちにかすんでしまうのである。残るのは自家撞着の残骸である。

学問が政治的要請に屈服したのか、それとも政治が虚構の学問に影響されるのか、いずれにせよ、政治的学問の帰結は、学問にとっても政治にとっても要諦であるはずの現実からの遊離である。「窮乏化」がその好例を提供する。『大月経済学辞典』は、「貧困化」の項で述べている。

窮乏化ともいう。貧困とは欠乏を意味する言葉であるが、経済学上では、労働力再生産の不可能な生活状態を意味する。……貧困の重要な要素は、欲望や生活的必要の充足されない状態であるが、この場合の欲望・必要は、たんに物質的なものだけではなく、人間の文化的欲望・必要を含むものでなければならない。……貧困は必要な生活資料の欠乏状態だけでなく、労働にみられる非人間的な諸条件(過長労働時間、高い労働密度、単調、労働苦、労働災害、職業病、健康破壊、年少労働の増大など)のほか、それらの諸結果のひとつとしての無知・粗暴・道徳的頹廢などの人間の劣悪な精神状態をも含んだ概念である。

コメントするのがうんざりする程だが、黙っても居られないので、若干のことを指摘しよう。

(1) 「労働力再生産の不可能な状態」を窮乏化が意味するなら、現に資本主義が立っていることは、窮乏が無いことを意味しよう。いわんや発展するにおいておや。

(2) 「欲望」が充足される社会とはどんな社会であろうか。それは、「欲望」を最高権力者が決める「必要」の水準に抑制することによってのみ可能であろう。

(3) 「文化的欲望・必要」の充足は、思想に例をとれば、自由を圧殺し、国有化することによって可能であろう。(4)

(4) 仲井斌氏は「ふたつのドイツ30年」(『世界』1979. 9)で、東ドイツについて語るなかで、こう言っている。「国有化は生産手段の分野をはるかに越して思想の国有化にまで及んでいる。」(150ページ。)

(4) 「労働にみられる非人間的諸条件」の例として挙げられているもののうち、労働災害や職業病や健康破壊が、そしてまた無知・粗暴・道徳的退廃が現代資本主義に部分的ながら見られることは否定できないが、それらが、むしろ、資本主義の初期の頃、あるいは未発展な所程より多く見られるということの方がより真実であろう。

(5) 資本主義における窮乏化の強調は、その裏に、社会主義における窮乏化の克服とい

う楽観を背景にしているのは明白である。その社会主義での窮乏化の実態は、外に対して余りにも隠蔽されているので、必ずしも明らかでないが、ソ連についてのヘドリック・スミスやモハメド・ヘイカルの言、東ドイツについての仲井斌氏の言を聞くことで、及そのことは推測されよう。(5)

(5) 「共産主義者たちは、ツァーから受け継いだ中央集権体制を変革するより、むしろ逆に強化し、拡大して効率を高めた。……いまや帝政時代の貴族階級と同様、権力や特権をねたむ新しい支配階級が誕生している。逆説的にいえば、ソビエトはロシアの古いやり方にしだいに回帰してきたように見えるのかも知れない。」（ヘドリック・スミス『ロシア人』時事通信社、1978、下、236ページ。）

「共産党は母なるロシアに深い影響を残したが、母なるロシアもまたソビエト共産主義に大きな影響を与えている。ソ連の官僚主義と党はそのすみずみに至るまでツァー時代の官僚主義とロシア正教会の生きうつしである。」（モハメド・ヘイカル「スフィンクスと人民委員」「諸君！」1979. 11, 96ページ。）

序でに指摘すれば、わたしは社会主義について、以前次のように書いたことがある。

「社会主義は資本主義に続くものであるどころか、むしろ資本主義前への逆行現象ということになる。」（「受益者負担原則考」九州経済学会「経済・経営研究」第10集、1972、22ページ。）

「『社会主義』は封建主義に向かったの反資本主義ということになるだろう。」（「公私分明論」本誌第24号、1975、60ページ。）

「消費物資の豊かさや多岐性、とくに質の差を反映して、西のマルクにたいする東ドイツ人の信仰はマルクス・レーニンにたいする信仰をはるかに上回る。」（仲井斌、前出、141ページ。）

(6) 欲望の不充足という心理的要因を貧困について見るならば、ピグミーの生活こそ貧困を克服しているということになるが、それは余りにも馬鹿げているので論外として、「労働力の再生産が不可能な状態」にあって、日本人の大部分が中流意識を持つなど考えられないことである。「勤労者」（その定義は措いて）（母集団全国20才以上の有職者）は仕事に対して満足22%，まあ満足51%，やや不満20%，非常に不満4%，すなわち満足派が73%もいるという数字（総理府広報室「勤労者意識」調査、「世論調査」1978. 11）をマルクス主義者は何と読むであろうか。

「労働者(階級)」は、一方で誉め称えられながら、他方で軽蔑されてやまない。外ならぬマルクス主義者によって。マルクス主義者は、「労働者(階級)」の一方向的な貧困化を説けばとく程、この自家撞着に陥るということに気付かない。肉体的にも精神的にも退廃し、粗暴になり、無知になり……した「労働者(階級)」が、一体どうして革命の旗手になり得ようか。そこに見られるのは、一段高い所に身を置いて、「貧しき者は幸せかな」と説く宗教家の姿である。こういうことで、『大月経済学辞典』が、その序文（3ページ）で、「国民運動の新たな前進のための“幕”として貢献することができる」と望むなど笑止の沙汰と言うべきだろう。マルクス主義者は、「労働者(階級)」から阿片を取り上げて、「科学」の粧いをこらしたマリファナを吸わせたいのであろうか。

マルクス主義者こそ、知的貧困を体現しているようにわたしには思えてならない。

〔2〕 労働力

マルクス（主義者）は、「労働力」の発見を鬼の首を取ったかの如く喧伝し、自画自讃してやまない。ひと頃、マルクスを生かじりの新左翼連中は、「労働力商品」という言葉

ひとつで、社会的矛盾の一切を断ち切ることが出来るという見幕であった。マルクス（主義）経済学を「純化」したと自称する宇野派が、特に「労働力商品」論を強調していたようで、新左翼は専ら宇野派理論の受け売りに終始したように見受けられた。彼らは事を荒ら立てはしても、何らの独創的成果も残さなかった。

マルクス（主義）経済学で、「労働力」はどのように考えられているのであろうか、先ずそれから見て行くのが順序であろう。マルクス自体について見る前に、面倒だが、マルクスの弟子を自称する人たちの（代表的）見解を知っておこう。『大月経済学辞典』は言う。

生きた人間の体のなかにあって、人間がなんらかの種類の使用価値を生産するたびに運動させる、肉体的および精神的諸能力の総体のこと。労働能力ともいう。労働力は、ただ生きている個人の素質としてのみ存在し、また発達した個人はその身体とともに労働力をもっている。労働力の使用または消費または発揮が労働である。それゆえ、労働力と労働の相違・関連は、機械そのものと機械の運転との相違・関連と類似している。マルクスが労働力と労働との区別をはじめて明確にし、労働力範疇を発見したことは、資本の価値増殖の秘密を暴露し、その剰余価値論を確立するための理論上の鍵となった。（力点は友岡。）

若干のコメントを加える。

(1) 「生きた人間の体のなかに」と言うのには、何とも恐れ入る。誰かが、「死（んだ人間の）体のなかに」とでも言ったのであろうか。（そう言いながら、死んでいるはずの機械を労働力になぞらえるのだ。）しかし、このことはよく記憶しておいたがよい。「資本家」といえども、「生きた人間」だから、「資本家」にも「労働力」があることを認めるのであろうか。ここでは認めるようであり、後で見るところだが、統計的処理の場合には認めていながら、はっきり明言したら困るというのが、マルクス経済学の実態であるとも思えるのである。そもそも、「労働者」は、「労働する者」を表わし、「労働する」は「労働力を使用する」を表わしている。しかも、「資本家」を「労働者」と截然と区別するのがマルクス経済学の慣いである。（とは言え、「機能資本家」ともなると、やや怪しくなる。この点には後で触れる。）

(2) 労働力 (Arbeitskraft) を「労働能力 (Arbeitsvermögen) ともいう」と言うのに何か意味があるのであろうか。それならそれで、何か説明があって然るべきであろう。わたしが見るところ、マルクスの惰性的な口写しに過ぎないようである。しかし、Kraft と Vermögen とでは、明らかに、意味、語感が異なり、無原則に、両者置き換えられ得るものではあるまい。邪推すると、「機能資本家」の労働のための伏線であろうか。すなわち、「資本家」には、労働能力はあるが、労働力はないにしても、時によりけりと言うわけである。

(3) 「労働力」に「機械」をなぞらえるならば、「労働力」と「労働」とには、「機械そのもの」と「機械の運転」とをもってするのではなく、「機械力」と「機械の運転」を当てねばならない。しかし、その場合でさえ、「労働者」に当るものは一体何か。文脈上、労働力を使用（または消費または発揮）する者は当の労働者であるけれども、機械力

を使用（または消費また発揮）する者は、当の機械であるはずはない。それは、家畜力や奴隷力を使用する者が当の家畜や奴隷でないのと同様である。機械は、家畜や奴隷と同様に、いかなる意味においても（主体的に）労働することはない。(6)「労働力」と「機械」とのアナロジカルな対応は、思いつき以上のものではないし、然も、この思いつきの背後には、「労働者」を家畜や奴隷に等しいものに見做して平気でいられる神経が覗かれるのである。

（6） ところ当りについては、金子甫氏の根気強い、精緻で独創的な論述に負うところが多い。特に、『労働力の消費』についてのマルクスの見解の難点」（桃山学院大学「経済論集」第14巻第2号、1972）を参照。

（4） 機械は、使用されなければ、たちどころに錆ついて使いものにならなくなる。機械を永持ちさせる最良の方法はそれを効率的に運転することである。「資本家」も「労働者」同様に生きていて、その体の中に労働能力または労働力があるとすれば、それは彼自身によって使われているはずある。もし使われていないとすれば、自然に錆つき、朽ち果ててしまおう。何も革命を起さなくとも、資本家は自然の摂理に従って消え行くではないか。

本家本元のマルクスはまだましであろうか。

われわれは、労働力または労働能力を一人の人間の肉体、すなわち、人間の生きている人的存在のうちに実存して、彼が何らかの種類の使用価値を生産するたびに運用する肉体的・精神的能力の総体であるとする。『資本論』長谷部文雄訳、青木文庫、②315ページ、向坂逸郎訳、岩波書店、第1巻、217ページ。以下、単に長谷部訳、向坂訳とのみ記す。）

すでに『大月経済学辞典』で見たのと格別変るところはないので、改めてコメントするまでもない。しかし、ここで、労働力を「運用する」のは、それを持つ当の本人のことであることを確認したところで、マルクスが全く違ったことを言っているのに行き当たると、一言あって然るべきであろう。

労働力の使用は労働そのものである。労働力の買い手は、その売り手を労働させて、労働力を消費する。『資本論』長谷部訳、②329ページ、向坂訳、第1巻、231ページ。力点は友岡。）

ここでは、労働力を「消費する」のは、その買い手（たる「資本家」）であると言っている。一体、どっちが本気なのであろうか。『大月経済学辞典』の説明でも、先に見たように、労働力を「使用または消費または発揮」するのは当の労働力を担う者であるのは、文脈的に明白であった。

マルクスは、所を異にすれば、正反対のことを、あるいは違ったことを、平然と言っている癖がある。言語表現も、所変れば品変る式に、どんどん変って行き、うっかりすれば、その変りに気付かないまま妙な所へ連れて行かれてしまう。例えば、こうである。

労働力の使用は労働そのものである。（同上。）

労働力の使用価値である労働そのもの……。同、長谷部訳、②353ページ、向坂訳、第1巻、252ページ。）

使用と使用価値とは別のことである。こういう場当りのとも思える言語使用から、真に

奇妙なことが生ずることになる。

マルクスは、「労働力の使用価値たる労働そのもの」を含むパラグラフのなかで、「それ自身がもつより多くの価値の源泉であるというこの商品の特殊な使用価値」と言ったばかりであった。すなわち、「労働力の使用価値」は、労働そのものではなく、労働力自体の価値より大きい価値を生み出す力があること（これ自体問題であるが今は措く）なのである。

何よりも、労働力の使用価値が労働そのものであれば、労働力と労働とを区別したところにマルクス（主義）経済学のメリットがあると自讃する理由が失なわれよう。なぜなら、労働力の使用価値が労働そのものであるなら、労働の売買は労働力の使用価値の売買であって労働力の売買でないからである。それで良いと言うのであれば、また何をか言わんや。

更に、マルクスは、労働力の使用は手放さないが、労働力の使用価値は手放す、すなわち、一方では労働（労働力の使用）は手放さないと言い、他方で労働（労働力の使用価値）は手放すと言うのである。

彼（「労働者」—友岡）は人として……労働力を売り渡すことによって労働力に対する自分の所有（権）を放棄しない……。〈同、長谷部訳、② 316ページ、向坂訳、第1巻、217～218ページ。〉

労働力の使用価値である労働そのものは、売られた油の使用価値が油商人のものでないのと同様に、その売り手のものではない。〈同、長谷部訳、②353ページ、向坂訳、第1巻、252ページ。〉

労働力の使用価値を油の使用価値と同列に置くと、折角の「剰余価値」論が泣こうというものだ。しかし、労働力を売り渡すかと思うと、労働力に対する所有（権）を放棄しないと言い、労働力の使用は手放さないが、労働力の使用価値は手放すと言うのでは、何がどこかさっぱり分らないと言うべきであろう。「労働者」が「資本家」に対して本当に売り、本当に売らないのは一体何なのか。あるものを売ると言ったかと思うと、その舌の根の乾かないうちに（乾いても言ってはならないことだが）、同じものを売らないと言うことでは、実のところ、「労働者」と「資本家」の間に果して「売買」という関係があること自体疑わしく思えて来る。

混乱はまだある。次の二つの文章を読み比べると良い。

労働者の行う消費は二様である。生産そのものにおいては、彼はその労働によって生産手段を消費する。これは彼の生産的消費である。同時にそれは、彼の労働力を買った資本家による、彼の労働力の消費である。他面では、労働者は労働力を売って得た貨幣を生活手段に用いる。これは彼の個人的消費である。……第1の消費で、彼は資本の動力として行動し、資本家に属する。第2の消費において、彼は自分自身に属し、生産過程の外部で生活機能を行なう。前者の結果は資本家の生活であり、後者の結果は労働者自身の生活である。（長谷部訳、④892～893ページ、向坂訳、第1巻、715～716ページ。力点は友岡。）

労働は、その素材的要素を消費する……消費過程である。この生産的消費が個人的消費と異なるのは、後者は生産物を生きた個人の生活手段として消耗し、前者は労働一生

きた個人の、自らを実証しつつある労働力[・]の生活手段として消耗する、ということにある。だから、個人的消費の生産物は、消費者自身であり、生産的消費の結果は、消費者とは別の一生産物である。（同、長谷部訳、② 338 ページ、向坂訳、第 1 巻、239 ページ、力点は友岡。）

長ながしい引用になったが、前の文章で、マルクスは「労働者」の生産的消費に「資本家の生活」を、「労働者」の個人的消費に「労働者」自身の生活をそれぞれ対応させた。ところが、後の文章では、生産的消費に「労働の生活」（という訳の分らぬもの）を、個人的消費に「生きた（「労働者」自身の一友岡）個人の生活」を対応させている。（7）

（7）「生産的消費」と「個人的消費」という用語の非対応ぶりが気になる。「生産的消費」と言えば、「不生産的消費」，「個人的消費」と言えば「集团的（あるいは、共同的，あるいは社会的）消費」というのが反射的に出て来そうなものである。何となれば，「生産的労働」には「不生産的労働」という具合に対立させるのがマルクスの得意とするところであろうから。

その前に，「消費は生産である」とする消費概念の不当な拡張乃至混用や，消費と消耗の混同には，手の施しようがないのを感じる。彼の乱れぶりは，次のような文章で最高潮に達する。

「たとえば石炭が蒸気機関により，油が車輛により，乾草が輓馬によって消費される……。」（同，長谷部訳，② 336 ページ，向坂訳，第 1 巻，236 ページ。）

これでは，蒸気機関や車輛や輓馬が生産（的労働を）することになる。

マルクスの混乱に付き合っているのは切りがないので，いよいよ本論にはいって行きたいが，なぜマルクスに混乱が生じたのかをも，なるべく合わせて考えて見たい。

第 1 は，「労働力の売買」を商品並に取り扱うのは無理ではないかということである。この疑問は前記の金子氏の研究（「労働力の販売は労働の譲渡であるというマルクスの見解について」『桃山学院大学経済論集』第 13 巻第 3 号，1971）に教えられて生じたものである。わたし自身，かつて，労働力商品で何故悪いと，やや開き直った言い方をしたことがあったが，浅慮を恥じている。「労働力の売買」について，マルクスは次のように言っている。

その所有者が労働力を商品として売[・]るためには，彼はこれを自由[・]に処理しえなければならない。……お互い対等の……一方は買い手であり，他方は売り手である。この関係が続く[・]のには，労働力の所有者が労働力を，つねに一定の時間のあいだだけ売[・]るということが要求される。何故かといえば，彼は労働力をひとまとめに売[・]るならば，彼は自分自身を売[・]るのであり，自由人から奴隷に，商品所有者から商品に転落するからである。（同，長谷部訳，② 315 ～316 ページ，向坂訳第 1 巻，217 ページ。力点は友岡。）

まず，奴隷は，自分自身の労働力をひとまとめに売[・]ったのであろうか。そんなことはない。いかなる意味においても，誰も自分自身を他人に売[・]ることは，原理上あり得ない。なぜなら，その代金の受け取り手が無いからである。それが可能なら，家畜は自分の労働力をひとまとめに売[・]っていることになる。家畜がそうであるように，奴隷は，奴隷の買い手の前に対等の売り手として立つことはない。売り手は別にいる。マルクスが，単純なことで重大な過誤を犯しているのは明白である。

マルクスによると，奴隷は，以前は自由人であって，自分[・]の労働力の売り手として，自

由に、買い手の前に現われ、対等の関係において、自分の労働力をひとまとめに売った結果である。それでは、「労働者」はどうか。マルクスによれば、「労働者」は、自由人であって、自分の労働力の売り手として、自由に、買い手の前に現われ、対等の関係において、自分の労働力を時間ぎめで売ること、彼の身の上に何か変化が起きるかと言えば、さにあらず、相変らず自由人であり続ける。どこかおかしくはないか。おかしい。マルクスによると、奴隷と「労働者」が異なるのは、ただ、一方が自分の労働力の（使用の）全時間を、他方が自分の労働力の（使用の）一定時間を、それぞれ売るという点だけである。そうであれば、前者が全身これ奴隷（10割奴隷）であり、後者は全時間分の一定時間だけの分身奴隷（例えば3割奴隷）であると言ってこそ理に適うのに、マルクスは、後者について、全身これ自由人であると言う。それをそうマルクスに言わしめないのは、労働者は二重の意味で自由であるという一方の自由である商品所有者としての自由にとらわれているからであろう。

「労働者」が、部分的であれ、自分の労働力を売りながらまるまる自由であるなら、奴隷もまるまる自由であっておかしくない。奴隷がまるまる不自由であるなら、「労働者」は部分的に（マルクスが言う「生産的消費」の時間中）不自由であり、残りの部分だけ（マルクスが言う「個人的消費」の時間中）自由である。こういう自家撞着から解放されるには、「労働力の売買」を「商品の売買」と同列に置くことをやめる以外にない。

労働力は「労働者」の体内にあり続け、商品は、商品所有者の体外にある。体内にあるものは、体ごとにはしか売れないのであり、体外にあるものは、体とは別に売れるものである。だから、後者での売り手は、売った後でさえ自由なのである。「労働者」が、あくまで四六時中自由であるとするなら、「労働者」は体内にある労働力を売ってはいないとしなければならない、恐らくその方が真実であろう。

それでは、賃金の原因由来は何であろうか。それは賃金のところで考えることにする。

第2は、「労働力」を、文字通り、「労働する力」と読んで、万人に備わっているものと、万人には必ずしも備わっていないものとをどう区別するのが良いかという問題である。端的に言って、「資本家」には労働力はないのか、生れたばかりの赤ん坊や死に瀕した老人や失業者や病人はどうかということである。マルクス（主義者）には、そういう問題関心そのものがそもそも無いように見受けられる。そこで妙なことが起きる。

マルクス（主義者）の「労働力」定義を読む限り、生きている人なら誰にでも労働力があるようである。しかし、「使用価値を生産する」という限定が付されているところから、生きている人なら誰にでもと言うわけにはいきそうにない。だが、「使用価値を消費する」と言うなら、それに当てはまらない人はいない。残念なことに、マルクス（主義者）が主張するのは、自分のためであれ、他人のためであれ、「使用価値を生産する」ことであって、自分が生産したものであれ、他人が生産したものであれ、「使用価値を消費する」ことではないので、生産をせず消費のみを行なう人びとは当然除かれることになる。そうだとすれば、「あらゆる人」に労働力があることが偽になる。「あらゆる人」を生かせば、「使用価値を消費する」としなくてはならなくなる。「消費は生産である」ことをここで持ち出せば困難は解決するだろうが、それでは消費と生産の折角の区別が台無しになるので、これは無駄である。しかし、消費は生産でなくても、消費にある種の力が必要なことは確かである。これを「消費力」と呼ぶのは、言葉の定義の問題である。これ

を「消費力」と呼ぶならば、生産するに必要な力は「生産力」となる。しかし、マルクス（主義者）は、「生産力」を「消費力」と対になるようには使っていないのである。「労働の生産力」という言い方に見られるように、それは「労働の消費力」に対して用いられている訳ではない。（「労働の生産力」は、「労働を生産する力」ではなく、「労働が生産する力」であるのは明らかであるが、「労働の消費力」と言うと、「労働が消費する力」と読まれずに、「労働を消費する力」と読まれる可能性がある。）だが、「労働の生産力」という言い方は、マルクス（主義）経済学では、「自然の生産力」に対しての用語であるということを承知の上で、わたしは、「労働の消費力」を用意するものであると言いたい。そのためには、「自然の生産力」に消えて貰わねばならない。(8)「労働力」を主眼に置けば、「生産的労働力」と「消費的労働力」になる。(9)

(8) 「自然の生産力」というのは、マルクス(主義)経済学の「労働価値説」におけるアキレス腱(のひとつ)であると思われる。(今ひとつの腱は、その大きさについての規定である。)後で触れよう。

「労働の生産力」を「資本の生産力」に対して置くのは数学的には意味のあることであろう。この場合、「生産力」は、「生産性」の意味に使われる。

(9) わたしは、かつて、マルクスにならって、「生産的消費」と「個人的消費」という混乱気味の「生産と消費」の関係について、何とか整理できないかと苦心して、「外在的生産物の生産」（通常の生産）「内在的生産物の生産」（通常の消費）という言葉当てたことがあった。（『経済学への提議(4)』鹿児島県立短期大学「紀要」第14号、1963。）

万人に備わっているのは、消費的労働力である。生産的労働力は一部の人びとに限られる。もちろん、マルクス（主義者）が毛嫌いする「資本家」も、生産的労働力の担い手である。（そのことは、意図しないうちに、マルクス主義者も認めている。直ぐ後で知てであろう。）消費的労働力を失なえば死である。

人口は、まず、大きく、必然人口と偶然人口に別けられる。必然人口は、年令の自然的推移によって、若年人口、壮年人口及び老年人口に分けられる。若年及び老年人口が必然人口中、消費（的労働）をするけれども、生産（的労働）をしない人口である。ただし、壮年人口中にも、偶然に、失業人口あるいは病气人口に、もしくは両方に同時に属する人びとがあり、これらの人びとも、消費（的労働）はすれども生産（的労働）はしない。壮年人口中の就業人口のなかに、いわゆる「労働者」と「資本家」も入る。どちらも、生産（的労働）人口を構成する生産（的労働）者である。

ところで、『大月経済学辞典』は、わたし流の定義付けで大いに救われるから皮肉である。それは、「階級構成表」という項目で、平然として、「資本家階級」を「労働力人口」に含めている。1975年を例にとると、「労働年令人口(15才以上人口)」は8,470万人、「労働力人口（完全失業者を含む）」は5,437.5万人で、このうち、「資本家階級」は320.3万人となっている。（この内訳を見ると、①個人企業主、②会社役員と管理職員、③管理的公務員とある。）

序でに、その「階級構成表」に若干のコメントを加えておく。

(1) （マルクス主義者の語り口にならって言えば、）「ブルジョア政府」による国勢調査報告によるとはいえ、労働年令人口を「15才以上人口」とするのは芸が無さ過ぎはしないか。「労働可能年令人口」とでもすればまだしもである。

(2) 「労働力人口」に完全失業者を含めたり、就業人口に休業中の者まで含めたりするのは、「労働力」の定義とつじつまが合わないのではないか。

(3) 「非労働年令人口」であれ、「非労働力人口」であれ、「階級」分類の対象にならないのは何故なのか。対象にならないとすれば、賃金についてのマルクス（主義的）見解は全面的に修正されねばならなくなる。

〔3〕 労働

マルクス（主義）経済学は、労働価値説に拠っているところから容易に分るように、特異な労働観に支配されている。「労働力」という「特殊な商品」の発見と、労働の「二者闘争的本性」は、マルクス（主義）経済学の価値論及び剰余価値論を支える車の両輪である。両輪がパンクすれば、マルクス（主義）経済学は走れなくなる体のものである。本論では、価値論や剰余価値論を直接取り扱うのを控えながら、労働力や労働について定義上の問題点を指摘し、自分なりに整理しているわけである。労働力についてすでに行なった。労働力について議論すれば、おのずから、労働について語ってしまうことになる。相当程度明らかにされたと思うが、改めて、明示的に、わたし独自の考え方を展開したいが、その前に、マルクスの見解を批判的に取り上げておく。

マルクスの労働についての一般的規定を先ず聞こう。

労働力の使用は労働そのものである。……

労働はさしあたり人間と自然との一過程、人間がその自然との物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する一過程である。人間は自然素材を……使用しうる形態において獲得するために、身体の自然力、すなわち腕や脚、頭や手を動かす。……われわれは、もっぱら人間にのみ属するばあいの形態における労働を想定する。(同、長谷部訳、② 329～330ページ、向坂訳、第1巻、231～232ページ。力点は友岡。)

ここで、マルクスは生産を主眼にしているけれども、彼の労働についての一般的規定が消費にも妥当することを指摘しておくのは無駄ではあるまい。消費において、「(自分の)労働力の(自分による)使用は(自分の)労働そのもの」ということが当てはまる。そして、このことは、動物一般の生活を律する原則でもあるという意味において、人間存在の生物学的な基礎でもある。自分と他人のそれぞれの労働が関わり合う局面で、「人間にのみ属する……労働」が登場する。もっとも、マルクスが、そこで「自然力」を引き入れているのは、いささか疑問である。「自然」の定義にもよるが、ひとに関わり合う「自然」は、すでに生身の自然ではないとわたしは考える。ひと以前に自然力があるとしても、それを現実的たらしめるのはあくまでひとであり、それ以外ではない。マルクスの自然力引き入れは、労働価値説に一つの難点を生み出す原因となる。

ところで、ひとの労働（マルクスの場合、「商品生産社会」における労働）に関して、得意の弁証法が開展される。

商品に含まれている労働の……二者闘争的性質は、私により初めて批判的に指摘され

たものである。この点は経済学を理解する軸点である。（同、長谷部訳、① 123ページ、向坂訳、第1巻、54ページ。）

マルクスが、ここで「二者闘争的な性質」として取り上げている労働の二重性は、「抽象的・人間的労働」と「具体的・有用的労働」のことであるが、それに言及するまえに、いくつかの二種類の労働をマルクスは想定しているので、それらにコメントを加えておこう。どうして、こういうことに拘わるかと言えば、わたし自身もまた、別途に、二重の労働を想定するからである。

(i) 「生きた労働」と「死んだ労働」

生きた労働は、「現在（の）労働」、死んだ労働は「過去（の）労働」と言い換えられ得る。前者は、生産物に対象化されつつある、ふつうの労働であり、後者は、すでに生産物に対象化された労働である。時制の上からすれば、「未来（の）労働」があって然るべきであるが、マルクスは用意していない。

この区別は、「対象化」という哲学的概念にとらわれたものであって、経済学的には意味のあるものとは思えない。むしろ、現在の生産物を「死んだ労働」とすることによってそれらが機能的に生きている事実に対して、良からぬ先主見を植えつける有害な役割を果たしているかも知れない。

(ii) 「動物の労働」と「人間の労働」

マルクスにおいては、動物の労働と人間の労働の区別は、必ずしも明白でないが、例証的に、蜘蛛と織匠、密蜂と建築師の違いを説いているところから、動物の労働は合目的性を欠くが、人間の労働は合目的性であるということに根本的区別の基準を見出しているようである。すなわち、予め目標を見定めた労働であるかないかということである。

しかし、合目的性の有無で両者を区別するという着眼は疑問に思われる。これについて、わたしは、以前に、「経済学への提議(3)」(鹿児島県立短期大学「紀要」第13号、1962)で論じたので、ここでは立ち入るまい。ただ、マルクス自身、区別を無にするような発言を行なっているのを指摘しておこう。先に引用したところだが、労働を一般的に規定しながら、「物質代謝を……規制し、調整する」と言うのは、合目的性をこそ表現するものであろう。

もっとも、区別以前に、両者は次元を異にするものであろう。人と動物が労働を交換するなら話は別である。動物は、いかなる意味においても、人と交換関係に立つことはない。動物の労働があるとしても、それは人の関わらない自然における代謝過程として位置づけられるものであろう。マルクスが「奴隷労働」について語るのも、論理的には、やはり問題である。

(iii) 「肉体（的）労働」と「精神（的）労働」

肉体のある部分、ある器官を重点的に動かす労働があるのも、精神の高度な緊張を要する労働があるのも認めた上で、わたしには、肉体を用いない精神労働、精神を用いない肉体労働があるとは思えない。

(iv) 「簡単労働」と「複雑労働」

両者の区別は、「未熟練労働」と「熟練労働」に、それぞれ重ね合わせると、それなりに理解できるが、マルクスは、両者を量的に比較することによって躓いてしまった。複雑労働を簡単労働に還元できる、言い換えると、簡単労働を単位（労働）として、複雑労働

はその単位（労働）の倍化されたもの、あるいは累乗化されたものだと言いながら、簡単労働を「平均労働」としてしまったのである。平均を持ち出すなら、平均は簡単労働そのものではなく、簡単労働と複雑労働の中間にあるというそれこそ簡単なことをマルクスは忘れてしまったのである。しかも、平均は、簡単労働と複雑労働の量をまず知って、両者から導き出される値であって、まず平均があるのではないのである。

(㌸) 「必要労働」と「剰余労働」

「剰余」が「必要」に対置されると、「余計もの」という感じがして来る。真意は、「労働者」にとって「必要」，「労働者」にとって「剰余」であるが、これは、「労働者」にとって「資本家」は「余計者」である（したがって「労働者国家」をつくり出さねばならない）という思想と重なり合う。社会主義にならなければ労働者国家は実現しないなどとは思えないが、もしそうであれば、「剰余労働」なるものを敢て発明する必要はさらさなくて、それこそ「余計もの」になる。

しかし、それよりも先に、「労働者」が存在するには「剰余労働」が必要であることも確かである。マルクス主義哲学者が言っている。

かんたんに考えても、資本家なしには労働者はありませんし、労働者なしには資本家はありません。（松村一人『弁証法とはどういうものか』岩波新書，31ページ。）

「必要労働」に対置するに「不必要労働」ではなく、「剰余労働」（なるもの）をもってしたのは、自分の弱点をマルクスは知っていたからであろうか。「必要労働」は「労働者」にとってのみ必要かと思っていたら、さにあらず、「資本家」にとっても必要だと、マルクス自身言っている。「それ（必要労働—友岡）は資本とその世界にとっても必要である。」（同，長谷部訳，②384ページ，向坂訳，第1巻，279ページ）そうであれば、回り回って、「剰余労働」が「労働者」にとっても「必要(労働)」であっても、ちっともおかしくない。

(㌹) 「私的労働」と「社会的労働」

この区別は必ずしも必らずでない。「私的労働が……直接に社会的な形態をとる労働となる」（同，長谷部訳，①151ページ，向坂訳，第1巻，77ページ）などのもって廻った言い方では、区別の意義自体失なわれそうである。私的と言え、原則的には消費（的労働）が当てはまる。（原則的と言ったのは、共同しての消費，公共消費財があるからである。）生産（的労働）は社会的である。（完全な自給自足などおよそ考えられない。）

(㌺) 「労働者の労働」と「資本家の労働」

「労働者の労働」とは同義反復であり、「資本家の労働」とは二律背反であるように思える。だが、マルクスは、遂に、「資本家の労働」を認めざるを得なくなったのだ。

利子という形態は他の利潤部分に、企業者利得という、さらに監督賃金という質的形態を与える。資本家が資本家として果すべき特殊な機能が単なる労働機能として表示される。彼が剰余価値を創造するのは、彼が資本家として労働するからではなく、彼の資本家としての属性はしばらく措き、やはり彼もまた労働するからである。だからこの剰余価値のこの部分は、もはや決して剰余価値ではなく、その反対物、遂行された労働の等価である。……搾取する労働と搾取される労働とは、いずれも労働として同じであ

る。搾取する労働も、搾取される労働と同じように、労働である。（同、長谷部訳、⑤543ページ、向坂訳、第3巻第1部、477ページ。力点は友岡。）

苦しい。マルクスの苦悶の表情が見えるようだ。何ともはや、支離滅裂たる文章であるとか。『資本論』が音を立てて崩れる音が聞えないか。

「資本家として労働するからではなく」と後髪を引かれながら、「資本家としての属性」には眼をつぶって、しぶしぶ「やはり彼もまた労働する」と、遂に事実の前に降伏せざるを得ない。

マルクスは、企業者利得について言っているのだが、ここまで来ると、彼が利子に拠る貸付資本家に寄せる最後の「資本家」像の解体まであと一歩である。搾取するのが労働であるなら、貸付けるのが労働であってどうしておかしきろうか。しかし、それにしても奇妙なのは、搾取するのが労働であると、最後の貞操帯までかなぐり捨てると、盗むのも、殺すのも労働であると、とどまる所を知らない程までに労働が拡散して行くであろうことをマルクスがつゆ思わないことである。マルクスは悪い方向へ自分の貞操を捨てたのだ。はじめから「資本家」も労働することを認めておれば、搾取することが労働であるなどと言わなくて済んだのである。

以上、二種類の労働のあれこれを紹介しながらコメントして来たが、最後の所で、図らずも「資本家」の労働が出て来て、わたしのここでの目的の半分は達成されたようなものだが、肝腎の「二者闘争の性質」を示すものとしてマルクス（主義者）が称揚してやまない二つの労働についてコメントしておこう。

(1) 「抽象的・人間的労働」と「具体的・有目的労働」と並べて見ると、得意の弁証法にもかかわらず、（否、それ故にと言うべきか、）奇妙さがすぐ眼に着く。「抽象的」対「具体的」は良い。問題は、「人間的」対「有目的」である。

「人間的」と言えば、反射的に（マルクスが、人間の労働と動物の労働を区別した如く）「動物的」が口を突いて出ることはあっても、「有目的」が思い浮かべられることはまずなからう。

他方、「有目的」と言えば、これまた反射的に「無目的」が口を突いて出て来はしても、「人間的」が思い浮かべられることはまずなからう。

「人間的」は余程「無目的」なのであろうか。しかし、それでは、回り回って、「動物的」が「有目的」になってしまうであろう。

(2) マルクスは、「動物の労働」と「人間の労働」とを比較した後で、以後「人間にのみ属する労働」を取り扱うことを前提した。それにも拘らず、マルクスは、「抽象的・人間的労働」と言って平然である。これではダブル人間である。つまり、「人間（にのみ属する）労働の人間労働」というわけである。

(3) 人間労働の人間労働とは同義反復もいいところであるが、マルクスが価値と使用価値を説明しながら、次のように言うのを聞くと、彼の言葉の使い方は分裂症気味であると思わざるを得ない。

およそ労働は、一方では……人間的労働力の支出であって、同等な人間労働……というこの属性においては、それは商品価値を形成する。およそ労働は、他方では、……

人間の労働力の支出であって、……有用の労働というこの属性においては、それは使用価値を生産する。（同、長谷部訳、①131ページ、向坂訳、第1巻、60～61ページ。力点は友岡。）

人間の労働力の支出が人間の労働だと言うのは、トートロジーだが、まあ我慢出来る。しかし、人間の労働力の支出が有用の労働となれば、もう我慢がならぬ。トートロジーを守り抜くならば、有用の労働力の支出が有用の労働であろう。

しかし、マルクスが、人間にのみ属する労働を前提して議論を展開していることは、しっかり記憶されねばならない。なぜならば、「労働の疎外」など、それでは起りようがないからである。疎外とは、簡単に言うならば、人間性が失なわれることである（と理解されているが、わたし自身は別の考え方を持つ。しかし、そのことは今は措く）。「疎外」を説くならば、折角の前提を棚上げしなければならなくなる。棚上げするのが具合悪ければ、疎外を説く理由はない。

もっとも、わたし自身、労働が望ましくない状態にあり得ることを否定しているのではない。それを説明するには、マルクス（主義）的労働観から離れて、別の理論を立てねばならない。それは、また、マルクス（主義）的労働観に見られた諸欠陥を克服したものでなければならぬであろう。わたしが用意しているのは、企業と作業という労働の二側面、あるいは二要因に関する理論であり、わたしはこれをすでに1965年の「企業と利潤」（鹿児島県立短期大学商経学会「商経論叢」第14号）で説いた。この理論は、賃金と利潤の関係をも整合的に説明すると思えるので、賃金に辿り着くまでも、一度はおさらいをしておかねばならない。

企業とは、指揮、命令、計画等の言葉といっしょに表現される労働の意思決定的側面である。その特徴は、結果が事後的にのみ確定することである。成功と失敗、当りと外れ等、人生のドラマは、この企業（的労働）に起因するであろう。マルクスは「動物の労働」と対照して、「人間の労働」はその始めに終りを見通している趣旨のことを述べたが、事が予定通り進行するのは希有のことである。

対するに、作業とは、実施、実行等の言葉とともに表現される労働の服従的側面であって、その特徴は、結果が事前にすでに確定されたものとして取り扱われ得ることである。多くの労働が機械で置き換えられつつあるが、それは作業（的労働）に限られる。企業（的労働）が機械に置き換えられ得ないのは、機械に意思決定機能を備えさせることが出来ないからである。

企業に利潤が、作業に賃金がそれぞれ対応する。もちろん、利潤も賃金も、も早、マルクス（主義）的な意味から離れる。

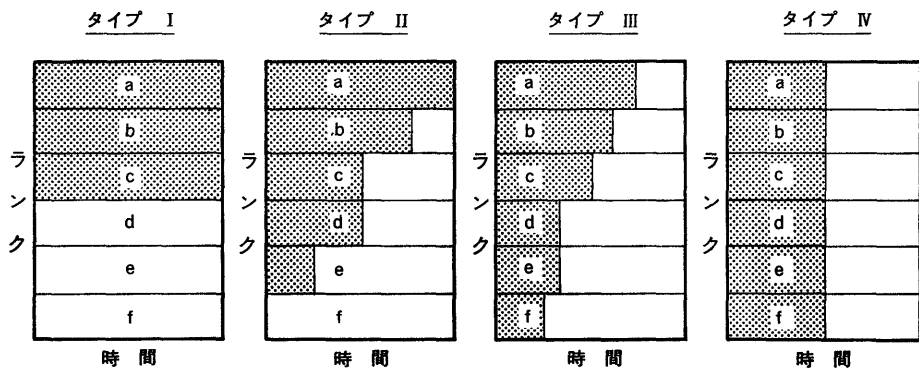
妙に力み返った形で論じられる「疎外」現象も、この図式で片が付くであろう。労働が労働者自身にとって疎ましいことがあるのは事実であり、そのことの故に、労働が不（または負）効用であり、労苦であり、犠牲であり、その時間は短かい程良いという思想が生れたのであろう。しかし、それは事柄の一面である。花見忠氏はいみじくも言う。

「仕事とは、あるときはなければよいと思うが、ないときはあればよいと思うもの」（Webster's Unfringed Dictionary）という定義もある。つまり、仕事をしているときは、こんな仕事はやりたくない、早く終ればよいと考えるが、なければ仕事を求めるの

が人間の本性である。（「働き過ぎと時間短縮」「中央公論」79. 9, 「東風西風」）

人は誰もが、自分の好みに合った労働をするとは限らない。趣味を持つ理由のひとつがそれであろう。だからと言って、趣味にしているものを、自分のプロフェッショナルな労働とすることを望むわけでもない。「疎外」感とは、そういうこととは別に、主として、作業（的労働）で起る現象であろう。もっとも、一身において、企業と作業とを合わせ持った労働を遂行している場合は別である。「疎外」現象は、労働が組織されて、人びとの間に、企業と作業とが極端に分裂する場合、専ら作業を担う人びとに見られるものである。そういう人びとは、機械に置き換えられ得る労働、あるいは機械に付属するかの如き労働に従事し、自分自分の意思決定が問われることはない。「経営参加」とか「自主管理」とか、それぞれの立場から主張されていることの内容は、要するに、多かれ少なかれ、あらゆる労働者が、企業と作業の両面を合わせ持つように組織されることであろう。「経営参加」には反対し、「自主管理」には賛成するというのでは、何を主張するのか分らなくなる。「経営参加」は「国政参加」と論理的には同じ構造であることも指摘しておいたが良さそうだ。

労働の組織のタイプとして、四つのものが考えられる。



(イ) 全労働時間が、企業と作業で2分されると仮定する。■は、各人の企業時間を、□は、各人の作業時間を表す。

(ロ) 組織は、a, b…fの6人で構成されていると仮定する。

(ハ) タテ軸は、組織における各人のランクを示す。タイプIにおいては、a, b, c間及びd, e, f間に、ランクの差はない。タイプIVにおいては、誰びとの間にもランクの差はない。

タイプIは、最悪の労働組織であり、企業（労働者）と作業（労働者）の間には、絶対的な壁が立っている。マルクス（主義者）が想定している資本家の生産様式は、これに類似する労働組織に基づくであろう。しかし、この図そのままは非現実的である。特に、100パーセント企業（的労働）に従事するということは、ありそうにないからである。

タイプIVは、非現実的であるけれども、最善の労働組織であり、も早、人びとの間には、企業（的労働）者、作業（的労働）者の区別は全く解消し、個人的にも組織的にも、一身において、両労働を担うという内容が整っている。これが非現実的であるというのは、組織が、単なる同好会的なものでない限り、すなわち、一定の役割を自覚した行動体

としてのチームである限り、指揮命令のライン・オーガニゼーションは欠かせないからである。

残るのは、タイプⅠにより近いタイプⅡか、タイプⅣにより近いタイプⅢかである。組織の目的に従って、いずれかが選択されようし、時に応じての並用も可能であろう。これは経営学の分野である。いずれが選択されようと、要は、それぞれのランクのポストが、機会均等的に広く開放されているかどうかである。人びとの好み、能力は異なる。（主観的）願望と（客観的）評価のズレもある。そのことを承和の上で、「疎外」感は、結局は当の本人の気持ちの問題であって、他人がとやかく言う筋合いの事柄ではないと言おう。作業（的労働）に生き甲斐、働らき甲斐を感じない人は限らない。他人の意思決定に柔順に従うというのは、ある意味で極めて気楽であり、その気楽さを好む人がいても、それをとがめる権利は誰にもない。

〔4〕 賃 金

一般に、「労働者（階級）」とマルクス（主義者）が言う場合、それは資本主義下の「労働者（階級）」のことである。単純に「労働する者」という意味での労働者は、何も資本主義下にいると限らないので、正しくは、「賃金労働者（階級）」となるのであろう。「賃金」こそが資本主義下の「労働者（階級）」を他の「階級社会」下の「労働者（階級）」と区別する目印であるというわけである。

もっとも、「賃金労働」という言い方は、趣旨に適っているとしても、「労働賃金」（略して「労賃」）という言い方は、マルクスの用法であるが、「労働賃金」以外の賃金があればともかく、理由のない言い方であって、単に「賃金」で差し支えあるまい。

その「賃金」が、マルクス主義者によってどう理解されているかを見て、その後で、当の本家本元のマルクスの考え方を検討するとしよう。『大月経済学辞典』の「賃金」の項には、こう書かれている。

賃金は直接生産者＝労働者の再生産に不可欠な生活元本＝必要生産物の資本主義的形態にはかならない。

枝葉を除けば、「賃金は労働者の再生産に不可欠の生活元本」ということになる。そこで、「資本主義形態」と分ったようで分らぬ表現をしているのは、察するに、「社会主義形態」を想定しているからであろう。同じ項目に、「賃金（社会主義のもとでの）」の説明があり、その内容は説得的であると言いが、今はそれに触れないでおこう。ここで、「再生産」という言葉が使われているが、実はこれが曲者である。同類の岩波『経済学辞典』（1965）では、もっと端的に定義されている。

賃金は労働力の再生産費である……。

一方は「労働者」、他方は「労働力」と言っていることに、マルクス（主義者）の「労働力」概念のあいまいさ、あるいは難点が露呈されているが、それはともかく、ここでも「再生産」という言葉が使われているが、その意味が今ひとつはっきりしないのは同様である。マルクスに倣う（のは仕方のない事であるが）ならならうで、何か一工夫があっ

然るべきであろう。では、肝腎のマルクスではどうなのか。

- a. 労働力の価値は、すべての他の商品の価値と同じく、この特殊な商品の生産、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定される。（同上、長谷部訳、②320ページ、向坂訳、第1巻、221ページ。力点は友岡。）
- b. 労働力は、ただ生きる個人の能力として存在するのみである。したがって、その生産は、彼の生存を前提とする。個人の生存が与えられていれば、労働力の生産は、彼自身の再生産または維持のことである。……労働力の価値は、その所有者の維持のために必要なる生活手段の価値である。（同、長谷部訳、②320ページ、向坂訳、第1巻、221ページ。マルクスは、現在<する>労働力の教育や教養について、次のcの後で言及しているが、これはbに含められるものであろう。）
- c. 労働力の所有者は不死ではない。……磨滅と死によって市場から消えて行った労働力は、少なくとも同数の新しい労働力によってたえず補充されねばならない。だから、労働力の生産に必要な生活手段の額は、かくして補充人員すなわち労働者の子供たちの生活手段を含んでいる。（同、長谷部訳、②322ページ、向坂訳、第1巻、222ページ。力点は友岡。）
- d. 資本制生産様式が行われるすべての国では、労働力は、売買契約が確定された期間にわたって機能しおえた後に、たとえば各週の終りに、やっと支払われる。だから、いずこにおいても、労働者は資本家に労働力の使用価値を前貸しする、……信用貸しする。（同、長谷部訳、②324ページ、向坂訳、第1巻、225ページ。）

マルクスの賃金に関係する以上の諸言明は、極めて重大な問題をはらんでいる。解きほぐすのは容易でないが、わたしは、さし当り、三つの点にしばって検討しよう。第1は、労働力の価値規定に関して、一般商品と同じだとすることから生ずる困難である。第2は、賃金に、将来（するであろう）労働力の準備（欠けて行く現在労働力の補充）費用を含めることから生ずる問題である。第3は、賃金を後払いであるとし、そこから生ずる論理的矛盾である。

まず第1点から始めよう。

(1) 一般商品の価値規定では、マルクスは一度として「再生産」という言葉を使っていない。彼の言明を素直に読むと、古い（現在する）商品を補充する新しい（将来する）商品を生産するのに必要であろう労働時間が商品価値を決めるということ以外には読めない。現在（する）商品の（過去の）生産に必要であった労働時間でもなければ、現在商品の維持（これをマルクスは「再生産」と言っている如くである）に必要な労働時間でもない。つまり、一般商品と特殊商品とでは、価値規定は内容的に異なる。

(2) 異なるにもかかわらず、同じだと言い張るならば、妙なことが起る。現在商品の維持費用の行き場が宙に浮くのである。一方では、それを価値に入るとは認めず、他方ではそれが価値に入る第1のものだとされる。

(3) 価値についての一般商品と特殊商品の規定が共通なのは、ただ将来する新しい商品の生産、すなわち補充のみである。一般商品についてはそれで良いとしよう。それでは、一般商品の（特に耐久財の）場合、維持は問題ないかと言うと、そうではない。ただし、

維持は、有期の保証という例外を除けば、売買が完了した後に、買い手によって行なわれるのであって、売り手によって行なわれることはない。他方、特殊商品については、むしろ、その維持こそが、賃金の主要部分であるとマルクスは言うのである。

(4) 維持が賃金を構成する主力であるとしても、労働力の場合、買い手によってではなく、売り手によって行なわれるという点で、一般商品と決定的に異なる。一般商品と同じだと敢て主張すれば、賃金労働者を奴隷や家畜なみに扱わねばならない。それでは気がとがめるならば、労働力商品は一般商品とは全く別ものだとしなければならなくなり、とどのつまり、労働力は商品なんぞにはなり得ぬものだということに到達する。ここからでも、労働力を商品の売買並に取り扱うことは無理ではないかという疑問が出て来る。

(5) マルクスの混乱がどうして生じたのか、その原因を見つけるのは困難である。念うに、労働力を、使用価値規定では（それ自身の価値より大きい価値を生産する特殊な力を持つということ）特殊商品であり、価値規定では一般商品と全く同じであるということに、資本主義的生産の矛盾の秘密を解く鍵を見つけたという思い込みが余りにも強過ぎて、思慮分別が周囲に及ばなかったのであろう。副次的には、この思い込みを助けたものとして、「生きた」「死んだ」という労働の哲学的区別の「発見」があるのかも知れない。つまり、一般商品は「死んだ」商品、特殊商品は「生きた商品」というわけである。しかし、生物学的に生死を言うなら、奴隷も家畜も生きている。経済学的には、あらゆる商品が（機能的に）生きているとすべきであらう。廃棄物になってはじめて死ぬのである。

第2点は、将来労働力による補充を賃金に含めることによって生ずる問題である。

(1) マルクスは、前触れなしに、新しい労働力による補充について言及するけれども、それが、彼らの親たる現在労働力にとって何故必要であるのか、何も語らない。また、新しく生れ来る子供たちが、労働者の子であるが故になぜ労働者にならなければならないかの理由も語らない。現在労働者は、自分の後継ぎを用意しなければならない動機を、現在の労働自体のうちに持つとは考えられない。

(2) 仮に、次代の新しい労働力の補充が現在労働者にとって必要であるとしても、それは、現在の労働から生ずるのではなく、経済学的には労働力を失ってもなお生き続けるであろう自分の老後のことを気遣ってのことであらう。つまり、自分の老後を自分の後継ぎに託するという関係において、労働者にとって、新しい労働力の補充が問題になるのである。しかし、マルクスは、そんなことを思い患って、この補充を指摘しているわけではなさそうである。

(3) 別のところで、マルクスは特に新しい労働力の生産が、「資本家」によって行なわれるとしている。「資本家は……労働者を賃労働者として、生産する。」（同、長谷部訳、④892ページ、向坂訳、第1巻、715ページ。）それなら、その生産費を賃金に含めるのは、生産を労働者に依託しているのであろうか。依託しているとすれば、後代の労働者は、初めから「資本家」の所有物である。否、何よりも、現在の労働者自身が、先代の労働者の「資本家」によって依託された生産の結果であるから、そもそもから、資本家に所有されている!? これでは、労働者はつねに奴隷並である。

(4) 賃金の「後払い」（というマルクスの主張）とも関連するけれど、マルクスは賃金を「労働力の価値または価格」の「労働の価格」への転形あるいは現象であると言っている。

る。（同、長谷部訳、③ 839ページ、向坂訳、第1巻、669ページ。）しかし、彼は、なぜ次代の新しい労働力の補充が賃金に転形または現象するのかを一向に明らかにしていない。転形であれ、現象であれ、労働力の価値と労働の価格、一対一に対応するはずである。現在労働力の使用という点では、その労働が賃金を構成するであろうことは理解できても、その労働に何ら貢献することのない次代の新しい労働力の生産のための価格が、その労働の対価に加えられねばならない何らの理由もないであろう。「後払い」される（とマルクスが主張する）のは、現実の労働の貢献具合こそが問題であることを示している。

(5) マルクスの以上のような難点が何に由来するのか、比較的はっきりしているように思われる。わたしは、彼の相続についての無関心が原因だと考える。マルクスにとっては「労働者」の子は「労働者」になるべく運命づけられている。そういう傾向が実際にあることをわたしは否定しない。しかし、そういう傾向が、何らかの制度によって補強された結果であるとしたら、その制度こそ問題であるだろう。マルクスにとっては、制度以前に、生物学的な遺伝法則がひとの社会にも動かし難いものとして確定している。身分制度によって、「階級」がもっともそれらしく存在していた時代社会においてすら、階級間の世代を越えての渡り歩きは見られなくなかった。

マルクスの意見が変え難いものならば、子供の教育費（新しい労働力の生産費部分）は、すべてこれその親が負担して然るべきであり、現代のマルクス主義者が、恐らくこぞって教育費の国庫負担を主張するのは、知ってか知らずにか、マルクスを裏切っていることになる。マルクスによれば、教育費問題は賃金問題に帰着するからである。

最後の第3点は、賃金の「後払い」の論理的矛盾についてである。

(1) 賃金が「後払い」である理由として、マルクスは、「家屋の賃貸価格と同じように、後になって実現する」（同、長谷部訳、② 325ページ、向坂訳、第1巻、227ページ）例を挙げている。「労働力の価値は……流通にはいる前に規定されていたのであるが、……労働力の使用価値は、後になって行なわれる力の発現にある。」（同、長谷部訳、② 324ページ、向坂訳、第1巻、225ページ。）明らかに、これはおかしい。耐久財について見ても、使用価値の譲渡と使用価値の発現とは、時間的に離れていても、つねに賃貸されるとは限らず、単純に売買されている。マルクスは、労働力が、賃貸家屋のように、賃貸されるとは一度も言ってはいない。労働力は単純に売買される。

また、裸の「労働者」（プロレタリア）に信用貸し能力を認めるというのは、労働力以外に売るべき能力を含めた財を持たないというマルクス（主義者）の根本理解に反する。信用貸しするとすれば、第1に、利子を取得するのであろうか（マルクスは何も言及していない）、第2に、「労働者」は、他の「労働者」を賃金後払いで容易に雇用可能、すなわち、「資本家」たり得ることにならないか（もちろん、マルクスはこんなことは想像だにしていない）。

(2) 賃金が現実的に前払いか後払いであるかは、支払いの時を置いての繰り返しによって、必ずしも判然としていない。しかし、賃金額は契約時に確定しているのだから、前払いであれば何も問題が残らないのに（マルクスは、ただ便宜的に、前払いとした方が関係を純粋に理解できるとして、それだけの理由で前払いに立ち戻る）、彼がそうしないのは、思うに、個数賃金（または出来高賃金）の説明に困るからであろう。企業者利得も、あるいは考慮されているかも知れない。

(3) 「後払い」の理由としてマルクスが挙げる譲渡と発現の時間的分離について言えば、要するに、労働の結果が事前に予測できないからであろう。もしそうであれば、マルクスの賃金には、わたしが云う企業（的労働）の対価としての利潤が含まれていて、「労働者」は「資本家」的でもあることになる。前貸しの利子部分が含まれていれば、貸付資本家的でさえある。

(4) ヨーロッパの風習として、週給が広く行なわれているので、賃金が週末に支払われるとするのは、1週間ぐらいの生活費をあこれ心配するまでもあるまいと、理解を示すことは出来ても、日本などのように、月給制ともなると、後払いだと割り切るには相当無理があるように思える。それに、雇用契約期間と賃金の支払い期間は同一であるとは限らないであろう。

(5) わたしは、「賃金」が現実的に後払いであり得ることを否定しているのではない。後払いではプロレタリアについてのマルクス（主義者）の定義付けがおかしなものになり、関連して種々の無理を重ねなければならなくなることを言っているのである。わたしの見解では、「賃金」が後払いされるのであれば、それはすでに利潤化している。「給料」という言葉は、賃金と利潤の複合物を表現するのも知れない。その場合、わたしがすでに説明した企業的労働を労働者は多かれ少なかれ担っているのである。そこまで進むと、「雇用」という関係自体も見直されねばならなくなるだろう。なぜなら、労働者は、それぞれの組織における共同事業者ということになるからである。

以上、三点にしぼって検討して来たが、要約すれば、マルクス（主義）的な「賃金」は、ある思い込みにせかされて無理に無理を重ねてつくり上げられた虚構概念であり、マルクス（主義者）の思い込みに反して、彼らの言い分に従っても、「労働者」は「資本家」の中に、「資本家」は「労働者」の中に、それぞれ相互に入り込んでいるのである。意図せざる結果というやつである。これでは、「階級」については結論が出たようなものだが、先急ぎするのはやめて、いよいよ最後の「階級」を検討するとしよう。

〔5〕 階 級

マルクス（主義者）が最も好む言葉のひとつが「階級」である。しかし、その割には、「階級」の意味は不鮮明である。マルクス自身、枚挙にいとまがないくらいに「階級」という言葉を使っているが、少なくとも『資本論』で「階級」の意味を殊更定義することはない。（その最後の「第52章 階級」においてさえそうである。）また、「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」という言葉で、大胆にも（あるいは性急に）世界史を総括した『共産党宣言』（1848）にも、「階級」自体の定義を見ることは出来ない。

しかも、『共産党宣言』においてであれ、『資本論』においてであれ、「階級」という言葉は、無原則的に使われている。

例えば、『共産党宣言』における「小工業、小商人、小金利生活者、手工業者と農民、これらすべての階級」という表現、『資本論』における「野蛮人階級」（長谷部訳、⑬1,145ページ、向坂訳、第3巻第2部、1,016ページ）という表現等は、「階級闘争」とか「二大陣営」とかの尖鋭な状況を想像させる「階級」の在り方とは関係がありそうには思えない。つま

り、社会学的、あるいは民俗学的な分類概念としてでも、政治学的な分類概念としてでも、良く言えば柔軟に、悪く言えば無原則的に、「階級」という言葉を使っていて、使い分けに格別気を配っているとは見受けられないのである。

それでも、マルクスの使徒たちは、依然として、「階級」にしがみつく。それが生活の糧であるかの如く。『大月経済学辞典』は、「階級」の項目でこう書く。

一定の歴史的段階における社会的生産組織のもとでの人の地位、社会的労働組織でのその役割、したがって彼らが処分する社会的富の取得の仕方およびその大いさによって区別される人々の大きな集団、つまり社会は生活手段を所有せず、その所有者に剰余労働を提供するほかない集団か、の二つの基本的な階級に分れるが、これを階級とよぶ。
(力点は友岡。)

若干のコメントをしよう。

(1) 「社会的生産組織」での地位と「社会的労働組織」での役割とは、言葉の言い換えに過ぎないであろう。典型的なものとして、軍隊（組織）や官僚システムを思い浮かべれば良からう。しかし、地位（の上下）や役割り（の相違）によって、（可処分）「社会的富」の「大いさ」が異なるのは良いとして、取得の「仕方」で集団が鮮明に区別されるとは思えない。大いさの相違は、例えば、「可処分所得の階級別構成」に見られるように、単なる統計学的グループ区分の原因となるだけのものである。

(2) だから、力点を付した「したがって」は、取得の「仕方」に関しては意味のない表現ということになるし、「つまり」が意味を持つには、統計学的グループを、敵対的2階級に紙の上で分け隔てるという無理を通すが必要になる。分け隔てる本人は操作の楽しさを味わって満足かも知れないが、統計学的に処理される人びとにとって、それに関心を寄せねばならない何らの理由もないであろう。ただし、政策的に利用されるとなると、何らかの身構えが生じよう。

(3) 改めて言うまでもないが、「地位」や「役割り」は、ただ対面的な二つのみに区別出来るものではない。対面的な関係があっても、それは一つの切片に過ぎず、対面的関係は幾重にも重なり合うのである。

(4) 生産手段の所有関係という点について言えば、「古代では奴隸主と奴隸、中世では領主と農奴、近代では資本家と労働者」（『大月経済学辞典』、前引用文に続く文章）とマルクス主義者が気軽に言っているのけるには、それぞれの社会はもっともっと複雑である。わたしなりに要点を述べると、奴隸が被搾取階級であるなら家畜もそうであると言わねばならなくなる、農奴は領主とともに生産手段を分有している、「労働者」と「資本家」は（すでに見たように）ずっとずっと相互に移行し合っている。

さて、わたしは、先に、最も「階級」らしいものの存在は、封建主義において見られると述べた。これは、マルクス（主義）的「階級」概念の主要な要素としての閉鎖性に着目したところからの言明である。マルクス（主義者）は、すでに指摘したように、遺伝法則に沿うものとして「階級」を見ることにおいて、彼らの「階級」は生物学的「種」と同断である。蛙の子は蛙式に、「労働者の子は労働者」（したがって、「資本家の子は資本家」）であれば、「大名の子は大名」、「百姓の子は百姓」と同断である。封建主義で

は、身分制度で説明できる。資本主義では、何で説明できるのであろうか。

わたしは、しばしば言うように、現実における傾向性まで否定しない。傾向性が認められる限り、資本主義における自由は、封建主義程ではないけれども、何程か制約されている。その制約を、わたしは相続制度の残存に見る。封建主義における相続制度は、身分の相続を通しての財産相続であったと特徴づけることが出来る。それに対して、資本主義は、人びとの身分制からの解放（市民革命）を出発としておるけれども、財産相続制度については、これを革命的に破棄するまでに至っていないのがふつうである。財産相続を通じて、間接的ながら、なお、残存する形で身分が相続される傾向がある。もっとも、資本主義は、発展につれて、財産相続制度そのものを廃止することなくとも、高度累進的な相続税の適用を進めることによって、相続制度に伴う社会的害悪を修正して来たことは、それなりに評価されねばならない。

マルクスのための弁解すれば、『共産党宣言』において、マルクスは第3番目のスローガンとして「相続権の廃止」を掲げた。⁽¹⁰⁾しかし、以後、相続問題は、何故か、マルクスの関心から離れてしまった如くである。『大月経済学辞典』にも相続の項目は無く、わたしが見付けた限り、「共産主義的所有」（の項目）を説明する文中に、「＜必要に応じた分配＞への移行にしたがって……個人的所有はその意義を減少させて、ますます補完的になっていくとともに、社会主義の段階に固有のその若干の属性（売買、贈与、相続など……）を失っていく」（力点は友岡）と、たった一回出て来るのみである。ついでに言及すると、インターナショナル・バーゼル大会（1869）で相続（権）の廃止についてマルクスと争ったバクーニンは、『大月経済学辞典』において単独に紹介されることなく、「無政府主義」の項目で「ブルードン主義、ついでバクーニン主義として科学的社会主義に敵対した」と貶されるのみである。⁽¹¹⁾

(10) 『共産党宣言』は、十箇のスローガンを掲げているが、問題を含むスローガン（「土地所有権を収奪し、地代を国家の経費にあてること」、「教育と物質的生産の結合」、「国有工場と生産用具との拡大」など）を別とすれば、殆んどは「ブルジョア政府」のもとで遂行されている。（もっとも、土地所有権については、農地改革の例がある。）例えば、累進所得税、相続権の廃止にはいたらないが、強度の累進相続税、国家資本と排他的な独占権とをもつ国立銀行によって信用を国家の手に集中すること、運輸通信機関を国家の手に集中すること、すべての人に対する平等の労働義務（ただし、「義務」という強い響きの表現はいささか問題）、すべての児童の公共無料教育、現在のかたちの児童の工場労働廃止。

(11) マルクス派とバクーニン派の相続（権）をめぐる対立の様子については、E. H. Carr ; Karl Marx : A study in Fanaticism. London, 1934, pp. 203～5 を参照。なお、わたしは、「経済学における私有財産の問題」（鹿児島県立短期大学商経学会「商経論叢」第15号、1966、52ページ）及び、（特にバクーニンの思想を中心に）「公私分明論」（本誌、第24号、1975、64～65ページ）で、これに触れている。

マルクス（主義）的「階級」概念のいまひとつの主要な要素としての「敵対性」という点では、封建主義の階級でさえかなり資格を失なう。確かに、おおまかには、領主的階級と農民的階級に区別される状況であった。しかし、両階級は敵対する以上に、相互依存적であったということの方が真実を表わすであろう。それぞれの階級は、また幾重もの小階級で（階段状に）構成されており、しかも、両階級の両方に足をかける中間的なものも

あった。

人間性の如何が問題になるとすれば、人びとが階級に分かれて存在すること自体ではなく、それぞれの階級に、人びとがいかにして所属するかが問われねばならない。封建主義の特徴は、それが階級的に構造化されているということよりも、それぞれの階級に入びとが所属する仕方が身分制度によって運命的に（個人意志に先立って）決定され、それが動かし難いものとされていたということである。個人意志の自由に対する抑圧は、身分制秩序に馴染まず、それから排除された商人グループによってむしろ自覚されたのであった。なぜなら、両階級とも、それぞれの階級にふさわしい身分的特権に安住し、身分制度の変更や廃止には頑くなに抵抗するのが普通のことであったからである。マルクス（主義）的な考え方からすれば、近代市民社会は、「被支配階級」たる農民的階級が「支配階級」たる領主的階級を打倒することによって成立するのであってこそ理に適うのだが、残念なことにそうならなかったのは周知のことである。「ブルジョア革命」というマルクス（主義者）による名称自体がマルクス（主義）を裏切っているのを、マルクス（主義者）は気付いてさえいない。

封建主義が身分制度に基づく階級によって構造化されていたのに対して、資本主義は、人びとが先天的に帰属させられるという意味での閉鎖的階級を存続の条件としてはいないし、むしろ、それ自身の発展にとって障害でさえある。初期の頃には、封建主義の残映のなかにあったので、マルクス（主義者）の認識をもっともと思わせる形で、人びとが存在していたことは確かであろう。雇用関係を基準にとっても、雇用する側と雇用される側との間には、通り抜け困難な壁が立っていた。この辺のことは、すでに「雇用の構造」（九州経済学会「経済・経営研究」第11集、1973年）で詳述しているので、そちらに譲る。そういう状態での資本主義は、非資本主義的要素が付着したものであった。それをひっくり返して資本主義と呼ぶのは、胞衣にくるまれた新生児を、その胞衣ともども赤ん坊と称するようなものである。胎児である間は胞衣は必要条件であろうが、いったん産れ落ちると、不必要であるばかりか、むしろ発育の障害になるから、産湯で洗い落され、あるいは、赤ん坊自体の新陳代謝的活動で清められて行くのである。マルクス（主義者）は、胞衣といっしょに赤ん坊を捨てようとしている。

資本主義といえども、それが統合された社会である限り、階級とは無縁ではない。しかし、その階級は、マルクス（主義者）が言外に意味しているように、決して閉鎖的ではないし、それぞれの階級のポストは人びとに対して機会均等的に開放されたものであり、したがって、決して敵対的な二大陣営に分たれるようなものではなく、多くの小階級から構成されている体のものであり、またそうならなければならない、そうなりうるものである。人びとの意志が働く余地のない階級として残るのは、わたしが度たび主張する必然人口における若年人口階級、壮年人口階級及び老年人口階級という年令別階級のみである。なかんずく、その壮年人口階級に、「資本家」も「労働者」もない状態で、大方の人々がすべて労働者として帰属するのである。

あ と が き

これを書き終える頃、「リーダーズ・ダイジェスト」の最近号（1979, 10）の「至言名

言」に興味を引かれた。この論稿で説くうちに湧き起って来た感懐にびったりである。何という偶然の一致であろうか。

愛すべきものは愛し、嫌うべきものは嫌わねばならぬ。ただし、この違いを見分けるにはすぐれた頭脳が必要である。

——ロバート・フロスト

自分の意見を絶対に変えない人は、よどんだ水のように。心の中にヘドロがたまっている。

——ウィリアム・ブレイク

進歩というものは、満ち足りた人からは生まれない。

——F. T.

「(賃金)労働者階級」論は、一体、何を目指しているのでしょうか。言うまでもなく、「統一戦線」であり、いっそう激しい「階級闘争」であり、そして最後は「社会主義革命」である。

その「社会主義」で何が起り、また起りつつあるのか。『大月経済学辞典』は、無邪気な幼児の瞳で慈母を見る如く、「社会主義」を信じて疑わない。「労働(社会主義のもとでの)」で言う。

社会主義のもとでの労働は、資本主義の場合とは根本的に異なる性格をもつ。それは……また搾取から解放された労働である。…労働は苦役であることをやめ、自発的・創造的な人間の本来的な活動に転化し、個人の全面的発達を促進する。(力点は友岡。)

その「社会主義」でどうして次のようなことが起るのか。

まず、1930年代末期。ソ連には、1,350万人の非自発的な労働者がいたと計算されている。(ロバート・コンクエスト『スターリンの恐怖政治』片山さとし訳、三一書房、1976、下巻、266ページ、Robert Conquest ; The Great Terror, 1973, London.)

1963年以降。東ドイツは西ドイツに対して、「政治犯を売するという人間の取引き」を行なって来ている。「1963年から1978年までに1万5千人がその対象となり、金額にして十億マルク以上に相当する物品が西ドイツから東ドイツに贈られたと想定されている。」(仲井斌、前掲、138ページ。)西ドイツは、もちろん奴隷要員として買い取っているわけではない。搾取から解放するためである。

二つだけの例で充分であろう。「社会主義」の悪口を言うのが目的ではないのだから。

わたしには、かねがね不思議に思えることがある。国家間の平和を主張する人びとが、国内における闘争を呼号することである。省略した言い方をするなら、平和のために闘争することを呼びかける人びとがいることである。マルクス主義者ばかりとは言わぬが、マルクス主義者が関わっていることは間違いないであろう。こういうジレンマは、すでに指摘したように、国政における民主主義を主張することの強い「革新」派が、企業体における民主主義たる経営参加には、「労使協調」だとして毛嫌いする傾向にも見られる。「労使」などの表現は、初期資本主義にはふさしくはあっても、高度化された資本主義では時代錯誤もはなはだしい表現であるというのがわたしの見解である。「労使」関係らしきものがあるとすれば、その分だけ資本主義は、捨てるべき胞衣をなお付着させたままにいる

ことになるであろう。

中国では、ひと頃、解放軍で階級制度を廃止したということが伝えられた。一方で軍隊を置き、他方でその軍隊から階級制度を廃止することの背理はやがて気付かれて、再び階級制度が復活したと聞く。軍隊の存在そのものは問わないとして、軍隊程、厳しい階級制度を必要とするシステムはない。革命政党も、性質上、階級的構造を採らざるを得ない。一枚岩とか、民主集中制とか言われているのは、要するに、軍隊の統帥権の問題である。マルクス主義者は、このことをどう釈明するであろうか。階級闘争を呼号すればする程、その闘争組織は、通り抜け困難な壁を張りめぐらした前近代的な階級的構造で武装され、革命が成功すればしたで、その国は、支配・被支配の階級的社會構造になるというのが、過去半世紀の歴史の教訓である。

資本主義は、古い意味での階級を成り立たせていた通り抜け困難な壁を、みづからの活力で知らず知らずのうちに、融解してしまうであろう。そのとき、「労働は、社会主義の場合と根本的に異なる性格をもつ。それは……また搾取から解放された労働である。労働は、苦役であることをやめ、自発的・創造的な人間の本来的活動に転化し、個人の全面的発達を促進する」であろう。（1979. 10. 24）